

16. 口蹄疫発生に伴う種雄牛の対応について

農林水産研究指導センター 畜産研究部

○河野 宣彦、(病鑑)堀 浩司、黒田 誠、小倉 宏二、大塚 高司、本多 正幸

【はじめに】

平成22年4月20日に宮崎県において口蹄疫の発生が確認された。このことを受け、大分県農林水産研究指導センター畜産研究部（以下、当部）では、防疫体制の徹底を図るとともに、種雄牛の分散飼育、凍結精液の分散保管等、出来る限りのリスク分散を実施したのでその概要を報告する。

【発生前の防疫体制】

車輛の踏込消毒槽を2カ所設置。部内を縦断するように市道、里道が通っており一般車輛の入場制限は行っていたが、完全遮断は不可能な状況にあった。

【発生後の緊急措置】

地域住民の了承を得て一般車輛の通行遮断を実施し、入部を南側1カ所のみとし、踏込消毒槽のみであった入口にゲート式車輛消毒装置を設置した。

職員についても、自家用車での入部を禁止するとともに、所定の場所で部内専用長靴、防疫服に着替えて、噴霧器で全身を消毒後、各持ち場に向かい、部内のみで使用する作業着に着替えるよう徹底し、ウイルスの侵入防止を図った。

【発生リスクの分散】

貴重な種雄牛の全滅を回避するため、当部が保有する基幹種雄牛12頭、次世代種雄牛20頭計32頭のうち、基幹種雄牛4頭、次世代種雄牛7頭計11頭を直線距離で約80km離れた国東町畜産公社に6月9日と15日に移動させ、分離飼育を行った。

7月27日の家畜の移動制限全て解除を受け7月31日に約1ヶ月半ぶりに当部に戻した。

また、約13万本保管されている凍結精液のうち、全体の約1/4にあたる2万7千本を県下に4カ所ある家畜保健衛生所に分散保管を行った。

【今後の対応】

部内において完全に通行遮断が出来る場所に、新たに32頭規模の完全閉鎖が可能な種雄牛舎を今年度末の完成に向け、現在建設中。

また、緊急に種雄牛の分散飼育が必要になった場合を想定して、当部から直線距離で56km離れた県の敷地を候補として選定し、依頼から移動まで1週間で対応できるように地元の業者と調整をとり、その工程表と図面はあらかじめ作成済み。

現在も、一般車輛は入場を制限しており、関係車輛についても、防疫服、専用長靴を着用し、車輛消毒槽を通過して部内に進入する形をとっており、常日頃から危機管理を徹底し、伝染病が発生しないよう心がけて行きたいと考えている。